

米欧亜回覧

第66号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

四月の全体例会、総会と

「米欧回覧実記と私」のパネルディスカッション

四月七日の全体例会は、一部総会、二部「実記と私」のパネルディスカッション、三部懇親会という構成で行われる。

二部は「実記を読む会」の担当で行われるもので、会員有志による発表を軸に会場からの発言も交えて、「米欧回覧実記」をどう読むか、「実記」に書かれていなかった裏事情、旅の関連事実、二字下げで書かれた久米邦武の評論の解釈など、いろいろの角度からの発表がある。と期待される。「実記」はまさに当会の基本テキストであり、「読む会」では既に発表以来、



新年懇親例会・乾杯
(1月19日・ラージマホール)

三巡目の「読む会」に入っているが、「回覧記 汲めどもつきぬ 泉かな」と詠まれるように、何回読んでも新しい発見がある古典といふべき書物である。

今回の発表者とそのテーマは左記の通りであり、多くの新しい知見が開かれるものと思われ、多数の方の参加が望まれる。

桑名正行「実記の語らぬ日米条約交渉―その熾烈な舞台裏」、小林富士雄「実記に見る、森林の旅」、岩崎洋三「実記とフルベッキ」、小野博正「私流・久米実記の読み方」、芳野健二「実記とアジア」、小松優香「実記と小国」

新年懇親例会、インドをテーマに盛会

一月十九日、第六十二回全体例会として恒例の新年懇親パーティが開催され、約五十名が参加した。今年で十四カ国目となる新年懇親例会のテーマ国は、昨年

の中国と並ぶアジアの大国インドであり、会場としたのはインドの宮廷料理レストラン・ラージマホール銀座本店。

来賓は、インド大使館のパンダ首席公使、そして、国連大学の創設に重要な役割を果たされたマリック博士のお二人で、それぞれスピーチを頂いた。さらに、パンダ首席公使にはインドの歴史、文化と日印関係について、約二十分にわたるスライ

ド上映と解説をしていただき、インドについての理解と交流の意義が強く印象付けられた。会場がレストランというこ

ともあつて参加者相互の距離が近く、インドおよび日本側のゲスト・スピーチも歓談の雰囲気の中で和気藹々行われ、従来にない趣向の楽しい新年懇親例会となった。

(詳細は二・三頁)

記念小論集の締め切り迫る

当会設立十五周年を記念した小論集の原稿が、間もなく出揃う見通しとなった。そこで、現在執筆を確認している方々の原稿が届いた時点で一次締め切りとし、第一段階の簡易版の編集方針、印刷形態、予算想定や配布方法など具体化の検討段階にすむことになる。

今後は、編集委員会を中心に具体化の検討が進められるが、執筆者をはじめ会員の皆様のご協力をお願いしたい。

(詳細は四頁)

今年、岩倉使節団の大旅行から丁度百四十年目に当たる。サンフランシスコに着いたのが一八七二年の一月十五日、雪のワシントンに着いたのが二月二十九日、夏のロンドンに着いたのが八月十七日、クリスマス間近のパリに着いたのが十二月十六日ということになる。この一年、アメリカに二百日余、

英国に百二十日余、そしてフランスには一八七三年にかけて六十日余も滞在する。まあ、今日では想像も出来ない、内閣の中枢メンバーを擁した大使節団でありながら、のんびりとした大名旅行であった。

本会では、先に歴史部会主催で「岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたのか」をテーマに使節の主要人物と留守政府の要人を軸にしたのせ会員有志によるパネルディスカッションを行ったが、この四月には「実記を読む会」主催で、同じく会員有志によって「米欧回覧実記」を裏からも斜めからも読むという刺激的な会が開かれることになった。

幕末維新の大変革を、久米

岩倉使節団から140年 ―今こそ、この大旅行の再認識を

泉 三郎

は「世界気運ノ変」に拠ると書いたが、その大変化は蒸気機関や電信に象徴される技術の大革新と産業革命に拠るものであった。平成の日本も、まさにグローバルイノベーションの大津波の中にあり、それは画期的な技術革新、コンピュータやITによる情報革命の出現によるものといつていい。

岩倉使節団のメンバーや随行した留学生たちは、その大変化に如何に対応したか、その使命感に溢れた実績、真摯な見聞の成果が、いま、われわれに勇気を与え、多くの示唆を与えてくれることは明らかである。岩倉使節団の旅は欧州各国を回覧し、マルセイユから横浜までの船旅もあつて、一八七三年九月まで続く。

したがって我々の百四十年目の反芻の旅も来年の九月までは続くことになる。当会としては、これを機に、より多くの人々、多くの国民に、この旅のことを知ってもらい、その意義を再認識してもらおうことが責務だと思う。会員はむろん関係各位のご協力を切にお願いしたい。

第62回
全体例会

新年懇親例会は、昨年引き続き『亜』
「インド」をテーマに盛会!

第六十二回全体例会・新年懇親パーティーは一月十九日(土)、ラージマハール銀座本店において開催された。出席者は約五十名。



ゲストのパンダ・インド大使館首席公使(右)とマリック博士

インド宮廷料理のレストランを会場としたのは、今年のテーマ国のインドについて先ず食べ物から勉強をしようと言う配慮から。当会幹事でもある井出先生のネットワークとご尽力、会員各位のご協力で、インド大使館の首席公使をはじめ素晴らしいゲストをお迎えすることも出来て、和やかでかつ有意義な盛会となった。カレー以外にも日頃あまりなじみのないインドの宮廷料理に舌鼓を打ちながら、インドの歴史、文化、日本との友好の歴史から、これからの国際協力についてま

で、活発なQ&Aや会話が続き、楽しいインド・ナイトとなった。パーティーを盛り上げていただいたゲストの皆様と会員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

【懇親パーティーの概要】

パーティーは十八時三十分から石垣理事・事務局長のオープニングで始まった。ゲストのご紹介の後、泉理事長が挨拶。

毎年、岩倉使節団の訪問国をテーマ国として、パーティーを行ってきたが、昨年の中国に続き今年はいよいよ「米欧亜の亜を代表する」インドをテーマ国とした。

使節団はマルセイユから船で帰国する途中セイロン島に寄港、『実記』にはインドについての記述もある。

R・Bボース、チャンドラボース、パール判事など、日本人にはおなじみの有名人が多いが、今年は第二次大戦後一九五二年にインドとの外交条約が結ばれてちょうど六十年目と云う節目の年。これを機会にもっとインドについて勉強し、友好を深めましょ

続いて井出幹事による乾杯の音頭の後、ラージマハールの店長からの料理の紹介があり、暫し飲食と歓談の時間となった。

再開後のゲストスピーチは、インド大使館パンダ首席公使のユーモアあふれる「パンダ」の話から始まった。曰く「二〇〇八年に日本に赴任した時、子供を連れて上野動物園にリンリンを見に行ったら。日本がパンダに数億円のレンタル料を払っている事に驚いた。インドのパンダ(公使)は、家族四人で来てもタダです。」

パンダ公使には、この会の高い知的好奇心に答えてインドの歴史や文化、更には日印関係についても触れて欲しいと、欲張ったお願いをしていたが、公使は見事にその期待に応えてくれた。数十ページに亘る映像や図表を駆使したプレゼンテーションは、約二十分にわたる素晴らしいレクチャーであった。印象的な内容の一部を紹介する。

一九五二年にインドはサンフランシスコ講和条約には参加せず、日本と単独に外交条約を結び、今年に記念すべき六十周年。
今のパキスタン、アフガニスタンも含むインドス文明から始まり、紀元前六世紀には王国ができ、二・五世紀には



スピーチ (マリック博士)



挨拶 (泉理事長)



オープニング (石垣事務局長)



パンダ首席公使はスピーチに続き、スライドで日印関係を紹介

ナランダ大学と云う教育センターが既に出来ていた。中国からも留学生が多く来て、日本に仏教が伝わったのは中国経由で、八世紀の奈良の東大寺の建立につながる。

・ Contact not Conquer (接触すれども征服せず) がインド文明の真髄。仏教、ヒンドゥー教を中心に多くの国に文明的な影響を与えている。「強盗もゲスト」と時に揶揄される「非暴力主義」の原点。

・ ムガール帝国、イスラムとヒンドゥーの融合時代、イギリスの植民地時代を経て、デモクラシーのインドを確立

・ 二十八県二十二言語十一億人、しかも五十%が二十五歳以下、二〇三〇年には日本を抜いてGDPで世界第三位になる経済大国

・ 日本とインドは、これほど相手国を補う国は無いと思われるような「ナチュラル・パートナーシップ」の国、例えば、若者の国と老人国、ヘテロ(多様性)とホモジーニアス(同質性)、小資本・巨大市場と過剰資本・縮小市場

・ パンダ首席公使は、インドと日本の協力関係(パートナーシップ)が世界の進歩と平和に貢献すると強調したが、会場の参加者もまさに同感! ただ最後に見せられた、パートナーシップを確認するために

インドを訪問した時の、野田首相までの日本の六人の首相と対応するインドのただ一人のシン首相の写真の対比はパワフルであった(効きすぎた?)

・ 氏は日本でCDも出している民謡と演歌の歌手であるが、インドと日本の文化には非常に近いものがある。自分の子供の結婚式には「親子坂」を歌ったが、インドにも同じ内容の歌がある。

・ パンダ公使の話はスタートで、双方で更なる詳細なディスカッションが不可欠。

・ 次主にビジネスの観点から、インドの現況について(株)インドセンターの島田卓社長から興味深いスピーチが

・ 昔から「三国一の〇〇」と云う表現があるが、唐(中国)と天竺(インド)と日本の事

イギリスとアメリカ、これからは再度アジアとアフリカで五十%以上となる。

・ インドには二十五歳以下の人口が六億人、ビジネスのキーワードは「過不足を知ること」。

・ 岩倉使節団の主要メンバーのご子孫でもある大久保利泰氏、伊藤満州雄氏からも、近況や回覧実記に纏わる話題のお話をいただき、パーティーの最後は、近藤理事の英語でのクロージングとなった。

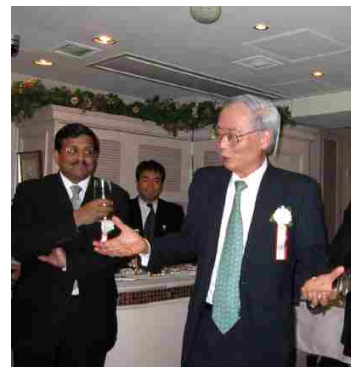
・ ゲストの皆様ありがとうございました。

・ 日本とインドの「素晴らしきパートナーシップ」を作り上げるために全員で努力を続けましょう。

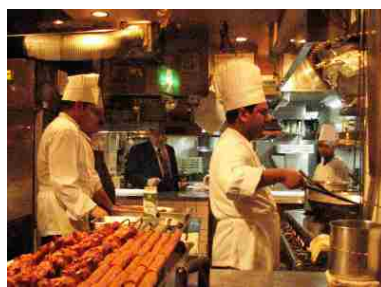
(文責) 石垣 禎信
(写真) 橋本 吉信
(写真) 近藤 義彦



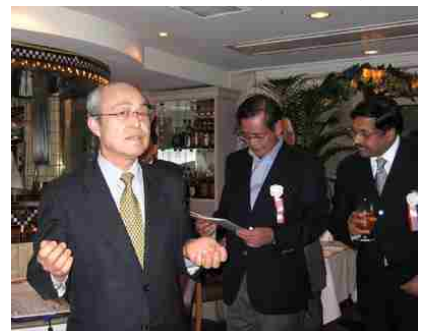
使節団ご子孫のスピーチ
大久保利泰氏(左)と伊藤満州雄氏(右)



スピーチ(塚本理事)



クロージング(近藤理事)



スピーチ(ビジネス観点からインドの現況を紹介する島田卓氏)

「岩倉使節団から百四十年、初めてポストンを訪ねて」(続き)

小松 優香

実際、街を見てもパソコン、携帯、家電製品のほとんどを韓国製が占めていて、車に関してトヨタ、日産、ホンダなど日本車は時折見かけるだけで、多いのはヒュンダイ、ベンツ・・・といった日本はどこへ行っても見つけたのか。このままでは日本はそのグローバル化の波にうまく乗れず、むしろ落ちこぼれになってしまっているのではないかと不安が掠めました。

大学のキャンパスではみな「自由」を持ち、いつでもどこでも自由に調べたい情報を検索しています。教授陣のオフィスについても情報が全てオープンで、図書館、美術館などありとあらゆる情報が細かく掲載されているので、学生が授業中に必要なデータを図書



ボストンの繁華街(『実記』)

館のホームページに行って探してやることも可能です。学生は、ノートの代わりにパソコンやPDAを持ち込みながら授業を受けています。また学生ミーティングはもちろん、大学教授の会議までもがスカイプを駆使して遠隔操作で会議を行っているのです。七十歳を過ぎた有名教授までもが、常に最先端ソフトを導入して、それと睨めっこしながら日々データ整理をしています。

さらに銀行の世界では、Bank of Americaをはじめ多くの銀行のセキュリティ、銀行システムはコンピューターがコンピューターを操作する仕組みになっていて、たいいていの人が会社にいなくても遠隔操作を行うだけでデータの操作や管理の仕事ができるシステムになっていて聞きましました。これは人間の頭脳の役目を完全にコンピューターが担っているという驚くべき姿です。

こうした実態を見ていると、アメリカは合理性とスピードの進歩史観に駆られた「科学・技術の国」であり、その状況は日進月歩なわけですから、日常においてもパソコンなしではすぐ情報難民になってしまおうという印象です。コンピューターが主人なのか、人間が主人なのか分

らないほどで、アメリカ人はネット病にかかっているときえ思えてくるのです。

しかし、その内容をみると質的に大したものではないことが多い、最先端技術を駆使しなければならぬほど、必要なことなのかどうか疑問が湧いてきます。こうしたことは、家庭をみても感じます。私は今回四つの家にホームステイしましたが、どの家庭にも必ず洗濯物を乾かす乾燥機と食器洗浄機があり、台所の道具と言えど包丁は十丁位、鍋もフライパンも大小合わせて十種類ずつ位は揃っているでしょう。手の込んだ料理というほどのものはほとんどしないのに、一体こんなに道具ばかりあって、どうするの? という感じですね。科学技術と産業システムの陰で、道具ばかりが溢れんばかりに開発され、人間が生きていくのに必要以上のものが作り出され、逆に怠け者人間を生み出し、人間力が退化してしまっているのではないかと、と危惧するほどです。

岩倉使節団から百四十年、こうしてアメリカの実生活に触れてみると、IT情報通信革命によって社会全体が物凄いスピードで動いているという印象です。使節団が訪米した当時、久米邦武は「日本は西洋に科学や産業、商業の面

では遅れをとっているけれど、文化や精神面では決して劣っているわけではない」というような感想をもらしたと記憶していますが、ある意味では現在もまさにその通りだと思えます。日本の生活には「美」と「清潔感」と「ゆとり」があります。それが日本の特徴であり、ずっと人間らしい、質的に高い生活のように思えてなりません。「今こそ幕末の志士に学ぶべきだ」「平成維新だ」などと言われているようですが、「文明の意味」をもう一度しっかり問い直す必要があるように思います。文明の機器はあくまで道具であり、真の「人間らしさ」や「人間主体のライフスタイル」こそ大事にすべきだと思います。アメリカからは確かにいろいろ学ぶべき点があると思えます。でも、日本の良さはしっかりと認識して、それを生かすかたちで技術や経済を取り入れるべきだと思います。

会員による小論集用原稿、間もなく一次締め切り

会員から編集委員に届いた当会設立十五周年記念小論集用の原稿は、当会ホームページ「会員のページ・特別寄稿」内の「①会員による研究資料」に、従来からの寄稿に加えて順次掲載している。

今後の日程は、原稿を依頼し現在執筆中の歴史部会・人物論シリーズを担当された数名の方々の小論が揃った時点で一次締め切りとさせて頂くことにする。原稿を未提出の方、また、既に編集委員や幹事に渡したがホームページに未掲載という方がいたらお問い合わせを確認してください。

一次締め切り後、「①会員による研究資料」にアップされている全てを候補にして小論集掲載の原稿を選定し、編集方針や印刷形態を決める段階にすすむことになる。そこでは、全体の構成(章立て)の企画、版型、総頁数や印刷予算などを想定すると同時に、原稿によって様々な、枚数(文字数)、文字の大きさや書体、日付の有無や執筆者名の表記などを何処まで統一するか(できるか)、伴う編集作業をどこまでするか(できるか)が検討される。

細目は未検証であるが、二月九日の編集委員会で議論された要点を紹介する。

・既にある原稿だけでも十分な分量があり、出版化の前段階の印刷物として、時間と予算を極力抑えた簡易版の発行をする

・簡易版といえども通常本サイズ(B5程度)にして読みやすい文字量とし、表紙も工夫して官庁の報告書のように

はしたくない
・会員には有料配布して印刷
代に充当するが、寄付の形に
して税控除の対象にできない
か検討する



歴史部会報

担当幹事 小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

『大隈重信と佐賀藩』講師 小野博正

二月二十日
開催、今年初
めの歴史部
会というこ
もあってか、
二十九名の
加者を得て、
盛会であつ

幕末の倒幕

までは、ほとんど関与するこ
とがなかった佐賀藩が、明治
新政府にあって、どうして薩
長土肥の列藩に食い込めたの
かを、大隈重信の例で、読み
解く講演となった。

大隅は佐賀藩の四百石の藩
士の家に生まれ、幼名は龍造
寺八幡に因み、八太郎。十三
歳で父親を亡くし、母親・三
井子の手で育てられる。藩校
弘道館では、葉隠の朱子学に
反発して、蘭学寮に進み、や
がて英学の時代と見定め、長
崎に藩の英学・致遠館を創設
し、フルベッキを校長に迎え
る。脱藩して、徳川慶喜に大
政奉還を説得しようとしたが
果たせず、前藩主・鍋島閑叟

に再三、倒幕挙兵を進めるが
実現せず、やきもきしている
内に江戸城開城を迎える。彼
は開城二日後に、新政府に徴
士として採用され、長崎裁判
所に勤務するが、やがて浦上
信徒弾圧問題を契機に、英公
使パークスと対決して、その
外交能力が内外で認められる
一方で、悪質貨幣問題処理
で、財務能力を買われて、会
計官も兼務し、やがて明治十
四年政変で下野するまでの明
治政府の財政を支え、近代日
本の財政システムを確立す
る。岩倉使節団外遊中の留守
政府は、まさに大隅内閣の呈
をなし、鬼のいぬまの洗濯と
ばかり、学制、徴兵制、地租
改正、鉄道・郵便制度創設、
太陽暦、銀行創設など、自由
奔放に腕を振る。使節団が帰
国した明治六年には、大隅
(民部・大蔵興)、江藤新平
(司法卿)、大木喬任(文部
卿)、副島種臣(外務卿)、
佐野常民(ウイーン万博公
使)とすべての要職は佐賀藩
の参議で占められた。その能
力はどうして養われたのか。
それは、佐賀藩の特殊事情に
鍵があった。幕府に代わり、
長崎の御番所で外国船警固に
当たった佐賀藩は、国防意識
が強く、藩主・鍋島閑叟の
下、日本一の技術力で鉄製大
砲や蒸気軍艦を持ち、海軍を
保有し、輸入の軍艦や鉄材の

資金に充てる、国産品の陶磁
器、白蠟、茶、石炭、和紙、
小麦、煙草、木綿など開発・
生産し、代品方として、大隅
はそれらに関与していた。

佐賀藩の武士道を著した
『葉隠』は、滅私奉公を求め
たが、その基礎に、個の確立
をおいた。即ち、私を大切に
し、決して佐賀人は群れない。
閑叟が鶴大名とあだ名さ
れるほど、最後まで倒幕に与
さなかつたのは、幕府への恩
顧、義兄弟の松平春嶽、伊達
宗城など佐幕派の存在、最後
は佐賀藩の日本一の技術・軍
事力と人材に自信があつたた
めとも言える。

それを体現したひとりが大
隅である。大隅は、福沢の慶
応義塾出身者を中心に、初め
て政治政策ブレインを持った
人でもあり、築地梁山泊で
は、伊東博文、井上馨、勝海
舟、五代友厚、前島密などが
毎日集まって談論風発の議論
をした親分のような存在で
あつたようだ。後に、立憲改
進黨総裁となり、最初の政党
内閣の首相、七十九歳で二度
目の首相となる。

最後に、日本の近代は、江
戸時代中期より始まっていた
との持論を展開し、その具体
例が佐賀藩の存在に顕現され
ていないかと述べて講演を締
めくくつた。

(文責) 小野 博正

関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

第五十七回

十二月十日開
催、出席者九
名。第二巻の第
二十六巻里味陂
府ノ記・上百二
十八頁から輪
読。

久米は真剣に
日本の米穀の対
英輸出の可能性
について述べて
いるが、今日の
日本の米を取り
まく状況は輸
入米の脅威であり、状況は当
時とは全く正反対であり隔世
の感を強くする。さらに機械
化による効率的な石炭の積み
降ろし作業を見学する。

後半は、前回に引き続きN
HK「さかのぼり日本史」シ
リーズ「明治」官僚国家への
道」の第三回「大久保利通の
内務省」のビデオを観る。内
容は大久保利通が米欧回覧で
西欧の圧倒的な国力を体験的
視察し、帰国後に国家近代化
政策として内務省と官僚を中
心にした体制を構築し、佐賀
の乱、西南戦争などの内政の
危機を乗り越えながら明治の
基礎を築いて行く姿を描いた
ものであつた。

大久保利通の設立した内務
省の行政を通じて大久保の維
新後の改革について話し合
い、藩と新政府の徴税につ
いての意見が交わされた。

第五十八回

二月十五日開催、出席者十
二名。定例『実記』輪読の
後、富田宏治教授(関西大学
法学部)に、明治維新を日本
特有の繰り返す開国、文明開
化の一つとしての「文明接触
と文化変容」の視点から講演
をして頂いた。講演題目は
「開国・維新・文明開化―文
化接触と文化変容の視点から
―」。

日本の政治思想文化の問題
に至る講演の一部を紹介す
る。まず、『開・閉』を繰り
返す日本史として、「開国」
は外来文化の受容が起きるだ
けでなく、秩序の流動化、社
会構造の改革が進むと同時に
「開かれた社会」が出現する
巨大な社会変革と政治変革の
時代である。一方、「閉」の
「鎖国」は秩序の固定化、社
会の停滞化の一方で秩序が安
定し「天下泰平」が到来して
日本の文化が醸成される。そ
の上で、「閉じた社会」の典
型として幕藩体制、そして、
開国は、ずっと瞬間凍結され
たままだった戦国末期の軍事
動員体制の凍結をもち、突
然、武士に戻った、とする。

参加者から「目から鱗が落
ちた」といった感想も出る
ほどで、講演後も十八時頃ま
で教授を囲んで話が弾んだ。

(文責) 難波 康熙

実記を読む会報告

担当幹事 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



■ 第百五十六回

十二月八日 開催、米国編

「北部遊覧の記」(十四・十五・十六卷)

この旅は、合衆国連邦政府の招待旅行でかなり大がかりなものであり、旅程もニューヨーク、ウエストポイント、ナイアガラ、サラトガ、ボストンの各地にわたっての十四日間に及んでいる。

出発時のメンバーは、使節団側から、岩倉大使、木戸副使、山口副使、肥田理事官、田中光頭理事官の他、久米、畠山を含む六名の随員。米国側から、マイヤ將軍(政府接待掛)、通訳、随行上院議員及びその妻女。それに駐米小弁務使(代理公使)の森有礼ほか数名の随員とサンフランシ



発表する芳野健二氏 (第157回)

スコ領事を委嘱していたチャールズ・ブルックスも参加している。総員は約三十五名であった。

主なルートは次の通り。

ワシントン蒸気車で出発 車中一泊↓ニューヨーク セントニコラスホテル 一泊↓船でハドソン川を遡り景勝の地ウエストポイントへ↓陸軍士官学校視察他 ゲストハウス他 二泊↓蒸気車でアルバニー經由ナイアガラへ↓ナイアガラ瀑布見物 インテルナショナルホテル 二泊↓蒸気車でファッシュショナルな避暑地として有名だったサラトガへ↓静養、グラントユニオンハウス 二泊↓蒸気車でボストンへ↓世界平和音楽祭に出席↑同上ほか 迎賓館的なホテル・リビアハウスに三泊↓スプリングフィールド(銃器工場視察)經由ニューヨークへ↓セントニコラスホテル 二泊↓蒸気車でワシントンへ帰着。

久米が持ち帰ったアップルトンの「旅行ハンドブック」や当時の鉄道地図、ニューヨーク図、ボストン図など関連地図・イラスト他を閲覧しながら説明がなされた。

(文責) 泉三郎

■ 第百五十七回

一月十二日開催、出席者八名、第二十一卷英吉利国総論、第二十二卷倫敦府総論。

新興大国アメリカで思わぬ月日を過ごした一行は、いよいよ世界の帝国イギリスへ。

総論の中で、人種、英語の成り立ち、国教会のいきさつを述べているので、私もあらためて「英国人の形成」「英語のなりたち」をしらべてみた。前者ではケルト四十%、アングロ・サクソン四十%ほか、後者では古英語(ケルト、アングロサクソン、ドイツなど)六十%、フランス、ラテン系三十%、ギリシャ語ほか十%となるが、これは我が国の、縄文人、弥生人の分布や、やまとことば、漢語、外来語の構成とよく似ており、ともに大陸から隔たった国の共通点といえよう。

に、スコットランドの寄与をあらためて知る。海軍力ではエリザベス一世以降の海賊たちが稼いだ財力が基礎となつたようだ。最後の欺瞞力は、枚挙にいとまがないが、ニュージールランドのマオリ族と結んだワイタング条約や、アラブ、ユダヤ、フランスをめぐる三枚舌外交など、栄光ある帝国の消しがたい汚点である。

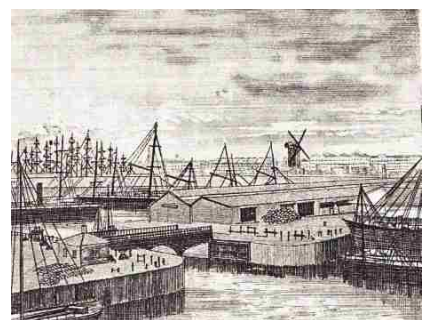
しかしパブリックスクールの教育方針や、直近のオリンパスを巡るウッドフォード氏の孤闘と日本人経営陣の集団隠蔽体質をみると、英国の伏流に確固たる実力をみることが出来る。そして残念なこと

最後に「英国見聞記」として岩倉使節前後の 一、文久二年竹内使節(市川清流) 二、高野広八曲芸一座(安岡章太郎「大世紀末サーカス」) 三、大鳥圭介産業視察、さらにその後の 四、漱石ロンドン日記、五、皇太子ヒロヒト六、皇太子アキヒト、七、皇太子ナルヒト八、ロンドンー東京五万キロドライブ(辻豊、一九五六)などの日記、記録をみながら、当時の英国の状況と彼らの思いを蘇らせてみた。

■ 第百五十八回

二月九日開催、第二十六卷

(文責) 芳野健二



リヴァプールのドック内(『実記』)

リヴァプール市の記上、第二十七巻リヴァプールの記下。 一行九人が馬車でユーストン駅に行き、特別列車で西北のリヴァプールに向かった。 お雇い外国人の一人である、ヘンリー・ダイヤーが日本人は「名誉」を重んじて「恥」を非常に嫌うと記述している。

○お雇い外国人を必要とした理由(梅溪昇「お雇い外国人」等) 徳川封建社会の行きづまり、幕末期の社会的矛盾の根源は、幕府の強本弱末主義(諸藩)を弱める方針をとり、独裁政治そのものにあつた。そして、このように国内で徳川封建社会が行きづまっていた時期に強大な圧力が外から加えられた。この外圧という世界的な必然性の流れは、産業革命によって急激に推し

進められてきた資本主義体制の発展の流れであって、徳川封建社会どころでなく封建社会一般をも押しつぶしてしまふほどの強い力をそなえていた流れであった。徳川封建社会の内部で商品経済が発展したことは確かであるが、それはこうした流れを自分の体内から生み出す力をもっていなかった。いいかえると、商品経済の発展は、明治維新の改革の条件であったが、原因ではなかった。

以上のように、徳川封建社会の行きづまりの中から明治維新の改革の方向に歴史の流れを進めたのは、外圧の性質と、それに対する日本人の対応の仕方であった。そうした外圧の性質についての認識は時の推移に従って徐々に深められ、またそれに応じて対応の仕方も変化していった。そうしたプロセスの中に「お雇い外国人」というものが発生して来る歴史的必然性が見られるのである。

明治維新後、近代化政策を推進するに当り、既に幕末、幕府が行っていたように、多くの外国人を招聘せざるをえなかった。西洋文明の発展度から、いちじるしく遅れている後進国日本としては、外国人の指導、援助を受けるよりほかに、急速にその政策を推進させる方法がな

かった。

○お雇い外国人の生活と周辺
給与(月給)は、フルベッキ(六百円)、ベルツ(五百円)、フェノロサ(三百七十円)、キンドル(千四百五十円)、クラーク(六百円)、岩倉具視(六百円)、大久保利通(五百円)、伊藤博文(参議で五百円、総理大臣で八百円)、森鷗外(少将で三百円)、正岡子規(四十円)、永井荷風(十二円)、庶民は十円。

○来日の動機

・故国ではむしろ逆境にあった人々が目に付く。
・厳しい攘夷思想のなごり
・お雇い外国人は度々襲われた。

・ふしだらなお雇い外国人と醜聞 不真面目なお雇い外国人も多くいた。
(文責) 小坂田 國雄

英訳実記を読む会報告

担当幹事 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp



■第九十七回

十二月十五日
開催、出席者九名、Ch76
Record of The City of Rome 2
一八七三年五月十三日に、宮廷にてエマヌエル国王に拝謁した。翌十四日ヴァチカンを訪

れ、宮殿、美術館を観て夜は王宮における晩餐会に参加している。十五日、フオールム・ロマーヌム、コロシムム、カラカラ浴場、カタコウム等の遺跡、軍閥施設(兵営、病院)等を視察、帰路途上、養蚕所を観察している。翌日も引き続き、遺跡、美術館、聖堂等を巡っている。二、三日滞在後十九日に、ナポリに向けローマを後にしている。

これらに関する記述について、英訳注(訳者コーニツキ氏)は幾つかの誤り、混同を指摘している。

いつもの通り、担当者を中心に、参加者全員で音読をした。担当者から人名、地名等の英語の読み方について、辞書で調べても判明しないものがある旨の指摘があった。

今回の読む会は、終了後の忘年会を含めて担当者宅で行われた。(文責) 永島脩一郎

■第九十八回

一月十九日開催、Ch. 77
Record of the City of Naples, Vol. 4, pp. 323-338

ローマから汽車でナポリ往復四日間の行程。最初に訪れたカセル宮殿で山上の懸瀑の見事さに驚くが、英訳者はそのために二十五マイル遠方から水を引いていることに気づいていないと不満。千二百室の巨大な建物とともども、久米

ならずとも「想定外」のスケールだ。

ナポリのホテルで鯛料理にありつくと「日本を出て以来初めて」と痛く感激する。案内役が駐日二代目公使フェドスターニ伯爵だったことが幸いした模様。

ナポリの人民や街については、「無学・怠惰で、街は臭気鼻を撃つ。イタリアに貧民多いが、ローマはフロレンスより甚だしく、この府はローマより甚だしい。支那の上海と同列。」と厳しい。しかし、一方で、ナポリ王国が一二〇〇年頃より仏・奥・西班牙に相次いで領有され、「王権の圧制、教門の弊害、封建の余毒」を最も激しく受けた地と冷静になのはさすが。「ナポリを一覧したる後に死なん」の名勝である、ヴェスヴィアス火山、ポンペイ村、珊瑚の細工についての記述が詳細だが、多くは一八七二年版のAppletonガイドブックからの引用の様だ。つかの間の休暇を満喫した様子が窺がえる。

■第九十九回

二月十六日開催、出席者六名。

今回から毎月成城の永島会員宅で開催することになった。

Chapter 78 はイタリア北



ローマのコロッセリウム (『実記』)

部、ロンバルデー及びヴェニス部で、英訳者は十九項目の注を付けているが、その内の七、八項目は久米の誤解・間違いを指摘したものである。しかし、英訳者も百パーセント正しいわけではなく、例えば、秀吉のキリシタン禁令発布について、久米の一五九五年をミスと指摘し、英訳者は一五九七年としている。実はこれもミスで正しくは一五八七年である。

英訳についての疑問点を三か所指摘し、ヴェネツィア共和国政体略図および以前に作成した「岩倉具視による支倉常長の再発見」をそれぞれ参考資料としてロービー配布した。支倉常長について久米は大友家による天正使節より三十年も後なので、関係ないとしながらも、伊達政宗の家臣であったことには疑問を呈している。

(文責) 三原 浩

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会員 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回、全体例会があります。

部会 テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役員 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局 「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101 FAX:03-3641-9407

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は下記の口座への郵便振込が便利です。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2012年4月～6月の予定です

☆第63回全体例会

日時: 4月7日(土) 13:30～16:30

テーマ: 第1部 年次会員総会 13:30～14:15

年次活動報告、会計報告、役員選任、
新年度活動方針

第2部 実記を読む会担当 14:30～16:30

パネルディスカッション

「米欧回覧実記と私」

場所: 国際文化会館講堂

会費: 2,000円(ご同伴者1,000円)

懇親会: 楓林(中華、麻布十番) 17:00～19:00

会費5,000円

☆実記を読む会

日程: 4月12日(木) 担当: 大森氏

5月10日(木) 担当: 桑名氏

6月14日(木) 担当: 小林氏

時間: 14:00～16:30

場所: 国際文化会館Cルーム(3月はEルーム)

会費: 1,000円

☆英訳実記を読む会

日程: 4月19日(木) 担当: 永島氏

5月9日(水) 担当: 斉藤さん

6月21日(水) 担当: 三原氏

時間: 14:00～(場所: 最寄り駅 成城学園前)

☆歴史部会

日時: 4月16日(月) 18:00～21:00

「幕末の使節団及留学生」(泉三郎氏)

5月21日(月) 18:00～21:00

「田邊太一」(田邊康雄氏)

場所: 国際文化会館

会費: 1,000円

☆関西支部例会

日時: 4月25日(水) 13:00～16:30

6月30日(土) 13:00～16:30

場所: 大阪弥生会館(06-6373-1841)

会費: 1,500円+昼食懇談会1,000円(12:30～)

編集後記

◇今年の新年懇親例会のテーマ国であるインドは、ベトナムまで来た『実記』第九十八章で、「この海の北の海岸にあるカルカッタ」について、また、昨年中国は、最後の第百章に記述があります。要するに、『実記』全五巻を読み通した人でないと使節団とは結びつかない国々です。近藤理事とパンダ首席公使の英語による懇親(対論)のクロージングが印象に残る、「米欧亜回覧」を標榜する当会ならではの新年の幕開けでした。
◇四月の全体例会は、年次総会と、実記を読む会担当のパネルディスカッションです。歴史部会担当の昨年十一月も好評でしたが、今回は六名の会員がパネラーとなりま。各パネラーの事前準備はもちろん、モデレーター(泉代表)との丁寧な時間調整が、多人数のディスカッションを成功させる鍵となります。当会の実力が発揮される全体例会となるはず。◇当会設立十五周年記念の小論集は、間もなく具体化の段階となります。第一ステップとしての簡易印刷版は、新年度のなるべく早い段階に全会員に配布できるようにしたいと思ひます。
(N)